古事記

倭建の東征

天皇、また、しきりに倭建命にのりたまはく、「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人どもとを言向け和し平らげよ。」とのりたまひて、御鉏友耳建日子を副へて遣はしし時に、ひひら木の八尋矛を賜ひき。

故、命を受けて、まかり行きし時に、伊勢大御神の宮に参入りて、神の朝庭を拝みて、すなはちその叔母、倭比売命に白さく、「天皇のすでに吾を死ねと思ふゆゑや、何。西の方の悪しき人どもを撃ちに遣はして、返り参上り来し間に、いまだいくばくの時を経ぬに、軍衆を賜はずして、今、さらに東の方の十二の道の悪しき人どもを平らげに遣はしつ。これによりて思ふに、なほ吾をすでに死ねと思ほしめすぞ。」と、憂へ泣きてまかりし時に、倭比売命、草那芸剣を賜ひ、また、御嚢を賜ひて、のりたまひしく、「もし急かなることあらば、この嚢の口を解け。」とのりたまひき。

相武国に至りし時に、その国造、詐りて白しし く、「この野の中に大き沼あり。この沼の中に住める神は、甚だちはやぶる神ぞ。」と白しき。ここに、その神をみそこなはさむとして、その野に入りましき。しかくして、その国造、火をその野につけき。故、欺かえぬと知りて、その叔母、倭比売命の賜へる嚢の口を解き開けて見れば、火打ち、その内にあり。ここに、まづその御刀をもちて草を刈り払ひ、その火打ちをもちて火を打ち出だして、向かひ火をつけて焼き退け、還り出でて、皆その国造らを切り滅ぼして、すなはち火をつけて焼きき。故、今に焼遺といふ。

倭建は東国を次々と平定していったが、伊吹山（現在の滋賀県と岐阜県との境にある山）の神を討とうとして大きな痛手を受けた。倭建は思うように足も動かず、杖をつきながらふるさと大和（現在の奈良県）へ向かう。

そこより幸して、三重村に至りし時に、また、のりたまひしく、「吾が足は、三重に曲がれるがごとくして、甚だ疲れたり。」とのりたまひき。故、そこを名づけて三重といふ。そこより幸して、能煩野に至りし時に、国を思ひて、歌ひていはく、

倭は　国のまほろば　たたなづく　青垣　山籠れる　倭し麗し

また、歌ひていはく、

命の　全けむ人は　たたみこも　平群の山の　熊樫が葉を
　髻華に挿せ　その子

この歌は、国思ひ歌ぞ。また、歌ひていはく、

愛しけやし　我家の方よ　雲居立ち来も

これは、片歌ぞ。

この時に、御病、いと急かなり。しかくして、御歌にいはく、

をとめの　床の辺に　わが置きし　剣の太刀はや
　その太刀はや

歌ひをはりて、すなはち崩りましき。しかくして、駅使を奉りき。

ここに、倭に坐しし后たちと御子たちと、もろ下り至りて、御陵を作りて、すなはち、そこのなづき田を腹這ひ廻りて哭き、歌詠みしていはく、

なづきの田の　稲幹に　稲幹に　這ひ廻ろふ　野老蔓

ここに、八尋の白智鳥となり、天に翔りて、浜に向かひて飛び行きき。

故、その国より飛び翔り行きて、河内国の志幾に留まりき。故、そこに御陵を作りて鎮め坐せき。すなはちその御陵を名づけて白鳥御陵といふ。しかれども、また、そこよりさらに天に翔りて飛び行きき。

【口語訳】

景行天皇が、また、重ねて倭建命におっしゃることには、「東方の十二の国の荒々しく振る舞う神と服従しない人たちとを説得し従わせて平定せよ。」とおっしゃって、御鉏友耳建日子を従わせて派遣なさった時に、柊の木で造った大きな矛をお与えになった。

こういうわけで、命令を受けて、おもむいて行った時に、伊勢（天照）大御神の宮に参上して、神殿を拝んで、それからその叔母である、倭比売命に申し上げたことには、「天皇がまったく私なんか死んでしまえと思うのは、どうしてなのでしょう。西方の悪者どもを討ちに（私を）派遣なさって、都に帰って参って来てから、まだどれほどの時も経っていないのに、兵士もくださらないで、今、重ねて東方の十二の国の悪者どもを平定しに（私を）派遣なさったのです。これによって考えますと、やはり私なんかまったく死んでしまえとお思いになっていらっしゃるのです。」と、嘆き泣きながら退出した時に、倭比売命は、草那芸剣をお授けになり、また、御袋をお授けになって、おっしゃったことには、「もし火急のことがあれば、この袋の口を解きなさい。」とおっしゃった。

相模の国に着いた時に、その国造が、（倭建命を）欺いて申しあげたことには、「この野の真ん中に大きな沼があります。この沼の中に住んでいる神は、たいへん荒々しい神なのです。」と申しあげた。そこで、（倭建命は）その神を御覧になろうとして、その野に入っていらっしゃった。すると、その国造は、火をその野につけた。そこで、だまされたのだと気づいて、その叔母の、倭比売命が授けられた袋の口を解き開けて見ると、火打ち石が、その中にある。そこで、まずそのお剣（草那芸剣）によって草を刈り払い、その火打ち石によって火を打ち出だして、（その草に）向かい火をつけて火勢を向こうに退けて、（野を）脱出して、その国造らをすべて斬り殺して、すぐさま（死体に）火をつけて焼いた。それで、今（その地を）焼遺という。

そこからお出かけになって、三重村に着いた時に、また、おっしゃったことには、「私の足は、三重に折れ曲がっているようで、ひどく疲れてしまった。」とおっしゃった。それで、その地を名づけて三重という。そこから（さらに）お進みになって、能煩野に着いた時に、故郷を思って、歌っていうには、

大和は国の中で最もよいところだ。幾重にも重なり合った青々とした垣根のような山々に囲まれている大和は、美しい。

また、歌っていうには、

命の無事な人は、平群の山の大きな樫の木の葉をかんざしに挿せ、お前たちよ。

この（二首の）歌は、望郷の歌である。また、歌っていうには、

なつかしいことよ。わが家の方から雲が立ち昇ってくるよ。

これは、片歌である。

この時に、ご病気が、急変して危篤になった。そうして、お歌に（詠んで）いうには、

乙女（妻）の床のあたりに、私が置いてきた太刀。ああ、その太刀よ。

歌い終わって、すぐにお亡くなりになった。そうして、早馬使いを（后たち御子たちのもとに）参上させた。

そこで、大和にいらっしゃった后たちと御子たちは、みんな（能煩野に）下向してきて、御陵を作って、すぐに、そこの水に浸った田を這いずり回って泣き、歌詠みしていうには、

水に浸った田の　稲の茎　その稲の茎に　這いまつわっている　山芋の蔓よ

すると、（倭建命は）大きな白い鳥（の姿）となって、天空に羽ばたいて、浜に向かって飛び去った。

そして、その国から飛び立っていって、河内の国の志幾にきてとどまった。そこで、その地に御陵を作って鎮座していただいた。そこでその御陵を名づけて白鳥御陵という。しかし、（白い鳥は）再び、その地からさらに天高く飛び立っていった。